

波多野勤子



アンクル・トム物語
二都物語 ほか

監修委員

田地 文子

鈴木 清

吉田 精一

波多野勳子著作集Ⅱ 8

アングル・トム物語
二都物語 ほか



波多野勤子著作集 第八卷

アングル・トム物語／

二都物語ほか

定価一五〇〇円

昭和五十八年二月二十日 第一版第一刷発行

© Kanji Hatano 1982

著作者 波多野完治

出版者 相賀 徹夫

発行所 株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一（〒101）
電話 編集（〇三）二三〇一五四五五

印刷所 図書印刷株式会社

・造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
・本書の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは著作者および出版者の権利の侵害になりますので、あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

波多野勤子著作集第八卷

『アンクル・トム物語／二都物語ほか』

波多野勤子著作集第八卷

『アンクル・トム物語／二都物語ほか』
もくじ

アンクル・トム物語……………7

二都物語……………41

いちばん よい いもん

白ぼらの くんしょう……………171

小ねこの ミル……………178

長い 五ふんかん……………187

いちばん よい いもん……………193

思うままに（あとがき）……………204

おさかなのうんどうかい

正一のみせばん……………225

かちかち山をおいだす話……………236

なおみちゃんとあかちゃん……………244

おさかなのとうしょう	249
おさかなのうんどうかい	254
ちがった三人きょうだい	264
あたらしいふでばこ	272
一つの勇氣	282
あとがき	294
絵本の選びかた・与えかた	297
解 説(乾侑美子)	369
著者年譜	385

装 幀 玉井ヒロテル
装 画 堀 文 子

へろ絵写真

昭和51年、勲三等宝冠
章授章の時の著者

アンクル・トム物語



一、かなしい売り物

今からおおよそ百年前ごろのお話です。

うすら寒い二月のある日の午後のことでした。アメリカ、ケンタッキー州のある町にりっぱな屋敷をもっているセルビイおじさんは、今、自分のうちの食堂で、お客様とたった二人でしきりに何か相談しています。

お客様というのは、セルビイさんと違って品のわるい顔つきの人で、そのくせ太い金鎖をちらちらさせたり、男なのに指輪をいくつもはめていたり、お金があるのを見せびらかしているような人でした。

「ねえセルビイさん、何度もうのようにぜひ、あのトムを私にゆずってください。あなたにお貸ししたお金のかわりにね。」

お客様というのは人買いをやっている人なのでした。セルビイおじさんは、人のよいりっぱな人でしたが、お金をもうけることもへたでしたし、お金のつかい方も、じょうずではありませんでした。それで自分のお金がなくなってしまったので、少し前にこのヘーレイからお金を借りました。

借りる時には、いずれ近いうちに何とかして返すつもりでいましたが、もともと足りないの
借りたのですから、つかってしまえば、あとは、なかなか返せません。ヘーレイは早く返せ、早
く返せと矢のさいそくです。

セルビイさんは困って、自分の持っているもので、なくてもすむものをみんな売りました。そ
れでもヘーレイから借りただけのお金はできませんでした。ヘーレイは今日もその足りないお金
を返してくれといってやってきたのです。けれどもヘーレイのほんとうの心はお金を返してもら
いたいのではないのです。それよりセルビイさんの家にいるトムをお金のかわりにもらいにかっ
たのです。

トム、それはセルビイおじさんのうちにいる奴隷ドゥルですが、その心掛けのりっぱなことは、黒人
仲間ばかりでなく、御主人のセルビイさんも認めているくらいでした。

だから、セルビイさんもトムだけはやりたくありません。

「誰だれか、ほかの人にしてくださいよ。トムだけは困ります。」

そういつてことわかりました。けれどもそんなことですぐ引きさがるヘーレイではありません。

人がいやだといえ、誰でもよけいにそれが欲しくなります。それにトムは誰の目にも目立って
いい奴隷です。きつといい値で売れるだろうとヘーレイはもう心の中で見積もっているのです。

このころは黒人は白人に全く動物扱いにされていました。同じ人間でありながら、黒人は犬や
馬や牛を買うように市場から買ってくるのです。そして食べ物とわずかな着物を与えるほか、い

くら働いても一錢もお金をやらなくていいのです。全然自由を与えなくてもいいし、主人の氣に入らなければむちでたたいても、骨の折れるほど棒で打ってもかまわないのでした。その上また主人の都合で何時でも誰にでも売ってもかまわないのです。黒人はそれについて一言も反対することはできませんでした。こんなひどいことがどうして行われていたか、ふしぎのようですが、それは黒人を自分たちと同じような感情をもっているものではない、犬や猫と同じように、その場その場で行動するものだと考えていたからです。

さてセルビイおじさんがなかなかトムを手放しそうもないのを知ると、ヘーレイは、それでは貸したお金のかわりに、セルビイさんの住んでいる家も屋敷もみんなとってしまおう、といい出しました。

そんなことをされては、明日からどこへ住んだらいいでしょう。それはどうしてもやめてもらわなければなりません。そこでとうとうセルビイさんが負けていいました。

「じゃ仕方がない、トムをあげましょう。そのかわりなるべく親切な人に売ってください。」

ヘーレイは大よろこびでした。けれども勘定してみると、いくらトムが高く売れても、これだけでは少し足りません。

「トムのほかにもう一人ください。」

ヘーレイがいました。ちょうどそこへかわいい六つ七つの黒ん坊の子がやってきました。この子はやっぱりセルビイ家の奴隷のエリザのひとり息子です。かわいらしいこう者なのでセル

ビー家のあいきよう者でした。ヘーレイはその子を見つけると叫びました。

「こりゃいい。あの子をつけてください。トムとあの子をもらったら、私はあなたにお貸ししたお金を全部返していただいたことにしますから。」

セルビーおじさんは、いやでいやで仕方がなかったけれども、これを承知するほか仕方がありませんでした。

二、わかれ

その晩セルビーおじさんは、ひるまヘーレイと約束したことを考えて、ためいきばかりついていました。あんまり元気がないので、奥さんのセルビーお婆さんがとうとういいました。

「何かわるいことがあるんですか、それともからだのぐあいがわるいのですか。」

いつまでもかくせることではないので、セルビーさんはトムとエリザのひとり息子売ることにした話をしました。

「そんなばかなことはいけません。トムはあなたの子供の時からずっとめんどろをみてくれた者です。あんなに正直でまじめな黒人はめったにあるものではありません。それからエリザの息子にしても、エリザは私にほかの誰よりもよくつくしてくれます。そのエリザのたった一つの楽し

みをとってしまうのはあんまりかわいそうです。」

セルビイおばさんは、こういってほんたいしましたが、どうしてもこうしなければ自分たちがここに住んでいることもできなくなるときいては、ほかにどうしようもありませんでした。

「かわいそうにね、かわいそうにね。」

セルビイおばさんはトムとエリザの息子のために涙を流しておりました。

この時、このセルビイおじさんとセルビイおばさんの話をきいていた人がありました。それはエリザでした。エリザはきくつもりではなかったのですが、ドアがびっしりしまっていていなかったの通りがかりにきこえたのです。それにエリザの息子ということばがきこえたので、立ちどまらないわけにはいきませんでした。

話をみんなきいて、自分の息子がどうしても明日は売られて行くのを知ると、エリザはもうじつとしていられませんでした。エリザはもう二人も子供をなくしているのです。そうしてこの子がたった一つの楽しみなのですから。

「奥さま、かんべんしてください。」

こう紙に書いてそれを棚にのせました。それからエリザはかわいい息子のハリーをだき起こして着物をきかえさせると、そっと外へ出ました。子供を守るためにエリザはカナダまでにげる覚悟をしたのです。

カナダはそのころでも黒人が自由にくらせるところだったからです。

行きがけにエリザはトムの小屋へよりました。トムの小屋はセルビイ家から五、六分歩いたところがありました。

こつ、こつ、戸をたたくとトムのおかみさんがカーテンをあけました。トムもおどろいて戸をあけました。

「どうしたの、エリザ。」

二人が一しょにききました。

「私、これからにげるの。おじさん、おばさん、旦那様だんながこの子をお売りになったのです。」

「え？」

「この子とそれからトムおじさんと。夜があけたらもう人買いがつれにくるでしょう。」

それからエリザは自分がきいた話をしました。トムははじめはただびっくりしていましたが、わけがわかってくると腰がぬけたようになってそこにびたりとすわってしまいました。

「まあ、ほんとうだろうか。うちのトムは誰よりもよく働くのに、何だって旦那様はお売りになるんだろう。」

おかみさんのクローお婆さんがいました。

「あんたも一しょにおにげなさい。ろくに食べ物を与えないで働かせるのでみんな死んでしまうという川下の方へ売られて行ったら大へんだ。あなたはどこへでも行かれる証明書を持っている。さあ早くしたくをなさい。」